

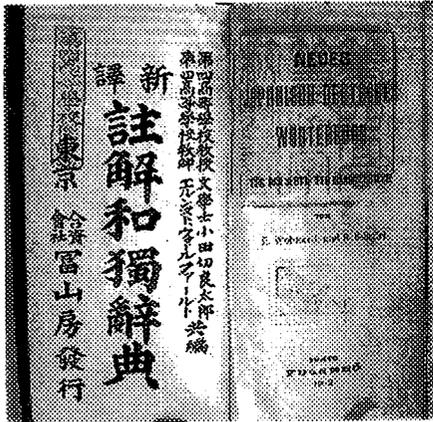
『新註解和独辞典』編者小田切良太郎・ヴォールファールト

上村直己

『新註解和独辞典』について

明治四十五年（一九二二）二月に富山房から刊行された小田切良太郎、田ヴォールファールト共編『新註解和独辞典』(Neues japanisch-deutsches Wörterbuch für den Schul- und Handgebrauch)ほど長期にわたり多くの学習者を裨益した和独辞書はなかつたと言つてよからう。独語辞書研究家石本岩根はかつて昭和九年の時点でこの辞書についてこう述べた。「本書の特色は要するに和訳対訳字林以来斯学に関係する者の痛感し來つた諸点を拡充せんと努力せる結果生じたるものと見るべく、明治年間に於ける和独辞書の清算せられたる姿と言ふを得るであらう、この点に於て小田切氏の功浅からず又本辞書の命、今日に及ぶ所以もここに存するのである」と。筆者も全く同感である。そういうわけでこの辞書は好評を博し、広く普及し、筆者所蔵のものは昭和九年四月発行で四十二版を数えている。今でも古書店で見かけることがよくある。

編者の小田切はその編纂意図を「緒言」で明確に述べている。



小田切良太郎、E・ヴォールファルト共編
『新訳註解和獨辞典』1912年刊、中扉

「従来の和独辞書の効果少なかりし所以に鑑み編纂の方式に於ても語詞の蒐集に於ても將た対訳語の選定に於ても在来のもの、改良といはんよりは寧ろ新たな和独辞書の創作を期せり、就中我等の最も意を用ひたるは対訳語に施すに註解を以てしたること其なり此の方法に依るにあらざれば初学者をして己れの求むるところの語を容易に且つ的確に見出さしむるを得ずとは我等の夙に懐ける確信なり然して此方法は和英辞書に在ては山口・入江の両氏に依て実行せられたるが和独辞書に在ては即ち本書を以て嚆矢とす、動詞の支配を明示したること其二なり之れ在来の和独辞書の閑却せるところにして我等の見て以て此の種の辞書の要件となすところのものなり、而して之を補ふに文例慣用句を以てする等、凡そ独逸語を学修する者の難しとするところのものを排除することに微力を竭す」

即ち本和独辞書の特色として次の点が挙げられる。①見出しの日本語が複数の意味を有する場合または二つの日本語にドイツ語が該当する場合にはそれぞれ明確な註釈を附し、初学者にも容易に対訳語が見つけれられる②動詞・前置詞など用法が困難なものは支配格を示し且つ例文を挙げ、また慣用句を多数網羅してあるので会話作文に役立つ③現代語を網羅している④巻末に附録として語形変化一覽、東亜の地名、日露度量衡対照表を載せていることなどである。そしてこの辞書に特徴的なことは多くの版を重ねたがこの間内容の変更は殆どなかったことだ。初版のままですつと押し通したということはこの辞書の大きな特徴である。

なお、編纂に際しては数種の和英辞書に依拠したが、就中山口造酒・入江祝衛共編『註解和英新辞典』及び井上十吉編『新訳和英辞典』に負うところ少なくなく、またR・ランゲの *Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache* も参考にしたと云ふ。(緒言J)

とにかくこの和独辞典は明治初期の『和独対訳字林』（レーマン校定）と昭和の木村謹治編『和独大辞典』と並んで最も重要なものであり、広く普及した点ではこれに及ぶ和独辞書は他になかった。

この和独辞典のことは研究者にはかなり知られており、ここではこれ以上述べる必要はなからう。だが二人の編者については断片的に知られているだけで、まとまった研究はまだ書かれていない。石本岩根もこの辞典の優れている点については述べているが、編者については全く関心を示していない。

小田切良太郎

出生・学歴

履歴書によると、小田切良太郎は明治五年（一八七二）九月十八日、栃木県安郡佐野町二千七百七十四番地に生まれた。父は栃木県人の小田切孫平と言いい良太郎はその長男。明治二十五年（一八九二）七月、第二高等中学校予科（独逸部）第三組へ入学した。この二高入學以前、小田切は明治二十三年六月十三日に独逸講文会に入会している¹。独逸講文会とは明治二十年代から三十年代の初頭までの第二高等中学校（のち二高）、独逸学協会学校、学習院のドイツ語教師たちによる共同事業で、講本というドイツ文学の名作詩文・戯曲の抜粋を冊子にしたテキストを用いて毎週一回、一高の講堂や本郷壹岐坂教会を会場にしてドイツ文学の講義が行われた。小田切が第二高等中学校入學以前に同會に参加していることは早くからドイツ語やドイツ文学に興味を持っていたことを示している。

明治二十七年七月、第二高等学校大学予科第一部（文科）第二年級に進入した。明治三十年七月、一高文科を武内大造（後年東京外語学校ドイツ語教授）、八杉貞利（同ロシア語教授）などと共に卒業し、直ちに帝国大学文科大哲学科第一年級へ進学した。同三十二年七月、文科大学特待生に選ばれた。同三十三年七月、東京帝国大学文科

大学哲学科を卒業、ドイツ哲学のため直ちに東京帝国大学大学院に進み、同三十八年七月十日で大学院満期となった。この間明治三十四年九月私立浄土宗大学の嘱託を受け研究の余暇に同校にて西洋哲学史及びドイツ語を教授した。また同三十六年九月私立真宗大学の嘱託を受け同校にて西洋哲学史を教授した。

第四高等学校教授時代。

明治三十八年（一九〇五）九月九日付けで金沢の第四高等学校教授に就任した（高等官六等、八級俸）。これは森内政昌（独語・哲学）の後任としてであった。明治四十二年（一九〇八）十月高等官五等に陞叙。翌年には従六位に叙せられ、さらに四十四年四月高等官四等に陞叙、六月正六位に叙せられた。同じく八月には第十七回大学予科学科検定委員を命じられた。

金沢時代の仕事としては着任早々、明治三十八年から翌年にかけて小田切はヘーゲルの『エンチユクロペデー』の二部を紀平正美（きひら・ただよし）とともに「ヘーゲル氏哲学体系」と題して翻訳し『哲学雑誌』に十三回にわたり連載した。これによつてヘーゲルの主要著作が日本語に初めて翻訳された。四高では西田幾多郎とともにヘーゲルを読んだ。西田の日記に「小田切君を訪ふ：ヘーゲル会読を約す」（明38・9・18）と見える。小田切はヘーゲルを読む会を西田らと作っていた。そのためにこれ以後も西田日記にはしばしば小田切が登場し親しく交流していたことが分かる。例えば「小田切君方に於て会読 午後三竹欽君来訪」（明38・10・15）「午後小田切君を訪ひヘーゲルをよむ」（明38・12・24）「欠勤 今日少しくよし 小田切君見舞いに来る」（明40・3・6）等である。そして明治四十二年二月二十日の日記には「午後ウォルフアートを訪ふ 小田切君あり字書を作るといふ」という注目すべき記載がある。この字書が問題の和独辞書であることは言うまでもない。この時点でウォルフアールと小田切の間で和独辞書の編纂作業が進められていたことが分かる。西田の日記に彼らの辞書のこと記載されているのはこの時だけである。日記によると、同年五月二十八日には小田切、石倉小三郎、小牧健夫、高橋郁治など独語教師たちが西田を見舞いに訪れた。

やがて西田は明治四十二年（一九〇九）七月学習院教授となり、さらにその翌年七月には京都大学文科大学助教授に転任したので交流は一旦途切れた。だが後に小田切も三高教授となつて京都に移ることになり交友が復活することになる。

教科書と教授法

明治四十三年六月号『独逸語学雑誌』精華書院（の「学校だより」欄には独文による「金沢におけるドイツ語研究」(Studium der deutschen Sprache in Kanazawa)が掲載されている。前書きには次のようなことが書かれている。

「金沢には国立の高等学校と医学専門学校の二つがあつてドイツ語が必修となつてゐる。高等学校（四高）には九人の日本人の教師と二人のドイツ人教師があり、専門学校には四人の日本人教師がいる。高等学校では、外国語特にドイツ語は主要科目なので徹底して教えられるが、専門学校では目的のための手段と見なされている。それ故高等学校の生徒は話す・書く・読む練習をするが、これに対して専門学校ではテキストを読むだけである。会話と作文は大抵ドイツ人が担当し、講読は日本人に任されている」（要旨）

次いでクラスと教科書及び担当教員が示されているが、小田切については次の通り。

一部二年（独法文）

Aschendorf, Klassische Novellen

Deutsche Grammatik(mündlich)

一部二年（独法文）

Omura, Deutsche Hand-Fibel

Deutsches Lesebuch I（第六高等学校）

三節三年

Eisler, Psychologie im Umriss

Aschendorf, Klassische Novellen

三節二年

Aschendorf, Klassische Novellen

文法は口述による (mündlich) としてゐるが、これは四高独語科の方針であつたやうで他の教師たちも同様である。Omura は大村仁太郎のことと、彼及び山口小太郎、谷口秀太郎共編の教科書の Deutsche Handbel für die Bedürfnisse des deutschen Sprachunterrichts in den japanischen Schulen (1897' 独逸学協会) を指す。日本語名は独逸語学入門とある。四十一ページ。第六高等学校編の読本とは Deutsches Lesebuch Teil 1-2, Nankodo 1908-09' (日本名: 独逸読本) の第三巻のことであらう。アイスラーの心理学概論は小田切が哲学科出身であることから使用したのである。

この記事で興味深いのは当時、四高の独語教師だつた高橋郁治、三竹欽五郎、雪山俊夫、小田切良太郎、石倉小三郎、高橋周而、Steiner, Wohlfarth 等十一人についての独文による寸評が見られることである。四人目に登場するのが小田切である。

(4) Herr Odagiri

Ist ein Greis, natürlich nicht im eigentlichen Sinne, sagt ruhig, bewegt langsam. Er ist so witzreich, wenn er einmal auf eine Geschichte kommt, so brechen die Schüler ins Gelächter aus, deutet zuweilen auf die schlechten Seiten derer an, doch so klug, daß man gegen ihn nicht auffahren kann: das alles brachte ihm allgemeine

Liebe. Was Deutsch betrifft, so ist er in der Grammatik zu Hause, spricht gut, die Lektüre auch schon. Daß er in der Psychologie und Logik bewandert sein will, führt ihn oft zur Sophisterei.

(小田切氏は老人で、勿論實際はそうではないが、静かに話し、ゆっくりと動く。彼はとても機知に富み、一度物語に話が及ぶと生徒たちは大笑いとなり、時々彼等の悪い面を暗示するが、賢いので怒りを買うことはない。すべてこれらのために皆に好かれることになった。ドイツ語に関しては、彼は統語論、特に文法に精通していて、会話がうまく、講読も素晴らしい。彼が心理学と論理学に通じようとしていることが、彼をしばしば屁理屈へ導く)

和独辞書の編纂と反響

いつ頃から小田切らは和独辞書の編纂を考えるようになったのだろうか。

「第四高等学校教授小田切良太郎氏と、同校教師エルンスト・ヤールファールト氏とが、前後七年の苦心に成る和独字典が発行された。両氏の苦心は非常なもので、昨夏軽井沢で、炎暑の猛威にもめげず両氏が此の辞典の爲めに孜孜として勉めて居たのを実見した評者は、まだ出版されぬ前から、この字典が独逸語界に多大の利益を与ふべきを予期して居た」

これは明治四十五年三月号『新日本』(富山房)に掲載された『新註解和独辞典』の書評の一節である。これによると、明治四十五年の出版まで前後七年とあるので、明治二十八年に編纂が始まったことになる。一方、前述のように西田幾多郎日記の明治四十二年二月二十日の条には「午後ウオールファールトを訪ふ。小田切君あり、字書を作るといふ」とある。このように二人は緊密に相談しながら編纂作業を進めていったものと思われる。

そして『新註解和独辞典』は明治四十五年二月六日、富山房より刊行された。初版

早速小田切は西田幾多郎に辞典を送った。⁶前記『新日本』に掲載された『新註解和独辞典』の書評ではさらに語を継いで次のように述べる。

「果して此字典が従来のものに二頭地を抜いて居るのは事実であった。その主たる特色を云へば、語の用例の多いこと、訳語の妥当を得るために苦心したこと、前置詞の用例に綿密な注意を払ったこと等である。体裁や印刷の点でも和独字書中に匹儔は少いが、外形はさて措き、内容の点でも最も日本の学生に適する様に苦心した跡は明に認められるし、これが最も本書の誇るべき点である様に思はれる。と同時に此結果として使用者から見て多少欠点と見ゆる点もある。即ち雅言風の邦語が多く省かれて居る。例へばあでやか、みめかたち、やんごとなき等のない如きは是である。次には動植物の名の省かれたもの、多い点である。例へば、あけび、ありくひ、コスモス、はいとり草、やぐるま草等のない類である。併しこれ等の雅言体又は動植物名は日常の語として用の少ないために、故らに省いたものらしい。況んや、漢語の字書で読む言葉の、耳遠いのを省いたのは勿論このためであらう。併しながら語学に必要な動詞、形容詞、前置詞、副詞等は遺憾なく注意周到に例を引て説明してあるし、名詞も雅言もむづかしき学名などの耳遠いもの、外は大体網羅難してあるから、適切と懇篤とに於て優に他の同類のものに優るもの(の)と云つてもよい。独逸語学習者に取て至大の恩恵を与へた両君の勞を多謝すると共に、これを江湖に推薦しやうと思ふ。」

このうちにこの書評では詳しく紹介し、問題点もあるとしながらも、それは許されるものとして全体としてドイツ語学習者に至大の恩恵を与えるものだと高く評価している。

同じく明治四十五年三月号『独逸語学雑誌』誌上では岡山の六高ドイツ人教師のオットー・ヘルフリッヒェ(Otto Hellritsch) はつづ述べた。

Wohl jeder Japaner, gleichviel ob Lehrer oder Schüler, wird sich oft bei seinen Übersetzungen aus dem Japanischen ins Deutsche oder beim Schreiben eines deutschen Aufsatzes ein gutes Japanisch-deutsches Wörterbuch gewünscht haben. Dieser Wunsch ist in Erfüllung gegangen. hat sich, fast möchte ich sagen, ideal erfüllt. Die bereits vorhandenen Wörterbücher können sich auch nicht im entferntesten mit dem Neuling

messen. Mannigfaltigkeit, Gründlichkeit, vor allem aber der Reichtum an *praktischen Konstruktionen*, wie man sie bei Anfertigung von Übersetzungen oder freien Arbeiten jeden Augenblick braucht, sichern diesem Wörterbuche unter allen ähnlichen Büchern den ersten Platz, ja machen es zu dem japanisch-deutschen Wörterbuche. Ich bin der festen Überzeugung, daß mit dem Erscheinen dieses Wörterbuches unter den Deutsch-beflissenen eine neue Ära anbrechen wird; denn dieses Buch stellt vermöge seines Konstruktions-reichtums dem Schüler mehr auf eigene Füße und macht ihn so arbeitsfroher. Darum warmen Dank den Herren Verfassern für ihren großen Fleiß, ihre große Sorgfalt und das in so reichem Maße bewiesene pädagogische Geschick.

(教師でも生徒でも恐らく日本人なら誰でも、日本語からドイツ語に翻訳する際に、或いは独文を書く際にしばしば良い和独辞書があればと願つたであらう。この願いが実現した、それも殆ど理想的に実現したと私は言いたい。従来の辞書はこの新しい辞書とは全く較べものにならない。多様性、徹底性、だが就中、翻訳を作成する時とか自主的な研究に際していつでも必要となる実用的な例文が豊富であることが、この辞書を同様の辞書の中で最高のものとし、確かにあるべき和独辞書にしている。この辞書の出現によってドイツ語界に新紀元が始まるものと私は確信する。というのはこの辞書はその豊富な内容によって生徒をもっと独り立ちにしてくれ、勉強をとでも楽しくさせる。それゆえにその大きな苦心、大変綿密な注意、そして十分に示された手腕に対して編者諸氏に心から感謝する)

従来の和独辞書としては明治初期にレーマン校定『和独対訳字林』があり、優れた内容の辞典であったが、既に入手が困難になつていた。これは日本語史の資料としても注目されている。その後明治二十九年には『和独字彙』(平塚定二郎他編、P・エーマン補正)、同井上哲次郎・登張信一郎・山田基編『新和独辞典』(大倉書店)が出、さらに『訳新詳解和独辞典』とほぼ同時期に岡倉郎編『新訳和独辞典』(金刺芳流堂)も出版された。前二書は既に入手が困難になつていた上に、岡倉のものと同様『訳新詳解和独辞典』に較べると種々の点で見劣りがしたのは明らかだった。

従つて『新訳詳解和独辞典』は和独辞書界には独歩の観があった。

初版が出てから四年後のことだが、大正五年五月号『独逸語学雑誌』に「和独辞書界の一新紀元！」と題して第十三版の広告が掲載されている。そこには勝ち誇つたような雰囲気さえある。

本書は多年高等学校に教鞭を執られ、独逸語教授に最も豊富なる有せらる、著者両先生が献身的励精の余大成せられたる本邦唯一の和独辞典なり。先づ語詞蒐集の綿密斬新、対訳の正確巧妙なるは勿論、註解明確親切にして初学者と雖も容易に所要の語を求め得べし。特に動詞、前置詞等用法の困難なるものは其支配格を示せる外多くの適切なる文例を挙げ、且つ日常慣用熟語をも網羅して洩らさず。夙に和独教書界に一新起元を劃せりとの公評を博し、今や斯界独歩の辞書となり、十三版を重ねて需要益々拡大せり。

大正八年（一九一九）にはエミール・ユンケル、権田保之助共編『袖珍和独辞典』（有朋堂）が出、高校生を中心に時かなり用いられたが、普及の程度は『新訳詳解和独辞典』には及ばなかつた。

三高教授時代

小田切は大正二年（一九一三）八月十二日付で京都の第三高等学校教授に転任した。（高等官四等、七級俸）独語を担当した。ほかに当時の三高のドイツ語教員には教授として片山正雄、内田新也、平田元吉、成瀬清、橋本忠夫、茅野儀太郎、小牧健夫、傭外国人教師としてフリッツ・エス・ブラッシュ、フランツ・オットー・ヘルフリツチュがあつた。以降、小田切は昭和七年に亡くなるまで三高教授としてドイツ語を講じ続けた。それとともに京大教授の西田幾多郎と往来が再開した。

京都では大正九年当時、京都市上京区岡崎町入江五十番地に住み、昭和七年当時、左京区南御所町四十番地に住んだ。

木村廉は「小田切さんの独乙語には仲々の思出がある」として次のように語っている。

小田切さんには二年の時にエッペンガハウスの心理学を習った。内容が六ヶ敷い上に先生の訳が頗る難解で随分閉口した。殊に doch, denn, noch, aber, doch, und, zwar などには先生独特の訳があつてその通りに云はないと通らないのだ。この事はヘルフリッチユも良く知つて居て、ヘルフリッチユの時間に「この doch の意味は？」などと尋ねると、「それは小田切さんに聞いて置こう」などと云つてゐた。——（大浦八郎編『三高八十年回顧』）

また、後年母校の三高教授、京大教授を歴任した古松貞二は「ドイツ語を教はつたのは小田切良太郎、成瀬清、片山正雄、ヘルフリッチの諸先生であつて、わたくしが理乙に入学しながら、現在ドイツ語の教師をつとめてゐるのは他にもいろいろ理由があるが、これらの得難い先生たちにドイツ語の手ほどきをしていただいたことが大きな力であつた」（『三高八十年回顧』）と語り、小田切をドイツ語の恩師の一人に数えている。

留 学

追悼文「小田切教授の訃」¹⁰に添えられた「略歴」によると、小田切は昭和二年（一九二七）二月十四日、文部省より独語及び語学教授法の研究のため満三万年のドイツ留学を命ぜられた。『官報』第三十七号（昭和二年二月十六日）に掲載された辞令は次の通り。

第三高等学校教授 小田切良太郎

独逸語及語学教授法研究ノ為独逸国へ在留ヲ命ス

その後「略歴」によると、昭和三年（一九二八）八月二日、伊太利及び亜米利加を在留国に追加した。さて昭和四年三月三十日調『文部省在外研究員表』（文部省専門学務局）を見ると、小田切について次のデータが記されている。

所 属	三高
氏 名	小田切良太郎

官 職	教授
学位称号	文
研究学科	独逸語及語学教授法
在留国	独、伊、米
在留期間	三箇年
在留国	二、六、十九
到着期間	(記載なし)
在留満期	四、三、三〇
備 考	短縮九月

少し補足すると、学位称号の「文」は文学士のことであり、研究学科の「独逸語及語学教授法」は当時のドイツ語教師が留学する際の目的の一般的な標記であった。在留期間の三カ年というのは語学教師の場合は一年半が普通だったので、小田切の場合は例外であった。在留国到着期間の昭和二年（一九二七）六月十九日というのはドイツに到着した日を指している。在留満期が昭和四年三月三十日というのはその日に帰国したと見てよいであろう。備考に短縮九カ月とあるが、これは在留期間が三カ年の者に対して文部省によつて取られた措置で、多く場合二年短縮された。なお小田切はこの間前記「略歴」によると、昭和三年十月二十三日に在留期間を同四年三月三十日まで延期している。延期の理由は次に述べることと関係があると思われる。在留国は「独、伊、米」とあるが、具体的にはそれ以上のことは殆ど分からない。ただし、次に紹介する資料によつて少なくともライプツィヒ大学で研究したことは確かである。ライプツィヒ大学文書館 (Universitätsarchiv Leipzig) には小田切に関する二通の手紙が保管されている。いずれも同大学の哲学部長の手になるもので同じ日付がある。なお、この資料は筆者が国際交流基金によりベルリンの壁崩壊

直前の一九八九年の夏にライプツィヒに滞在中、同大学（当時カール・マルクス大学）の文書館において発見したもので
ある。

Leipzig den 16.Juli 1928

□
712 a

An

das Ministerium für Volksbildung zu

Dresden.
~~~~~

Seit dem Kriege fehlt dem Ostriatischen Seminar der Philosophischen Fakultät die Mitarbeit  
philologisch-und historisch ausgebildeter und entsprechend interessierter Japaner. Neuerdings hat sich nun  
ein für diese Zwecke gut qualifizierter Herr eingefunden, Professor O d a g i r i,

Lehrer für Deutsch an einem Gymnasium in Kyoto, Verfasser eines bekannten japanisch-deutsch Wörterbu-  
ches und gegenwärtig mit der Abfassung einer deutschen Grammatik für Japaner beschäftigt. Leider sind  
der Urlaub des Genannten un die ihm zustehende amtliche Studienunterstützung im Gegensatz zu der bis  
vor kurzem üblichen Praxis nur auf zwei Jahre bemessen und gehen in Dezember zu Ende.

Da nun dem Ostriatischen Seminar und der unterzeichneten Abteilung an einer Verlängerung des Ur-  
laubes Odagiris liegt, bittet die Abteilung das Ministerium beiliegendes Schreiben befürwortend an das Kai-  
serlich Japanische Ministerium des Unterrichts weiterreichen zu wollen.

die philologisch-historische Abteilung  
der Philosophischen Fakultät

Moll

d.Z. Dekan

これは当時ライプツィヒ大学哲学部長であったモルの<sup>12)</sup>ドレスデン国民教育省宛ての手紙であるが、次のようなことが書かれている。第二次大戦以後、ライプツィヒ大学哲学部の東アジア学科では言語学・歴史の知識を持ち、そしてそれに関心を持った日本人の協力者を欠いていた。そこへ第三高等学校教授で有名な和独字書の編者で、当時日本人のための独逸文法書を編纂しようとしていた小田切氏がやって来て、同氏に白羽の矢が立った。残念ながら同氏の留学の期間と公費はそれ以前とは異なりわずか二年間として計算してあり十二月に終わる。東アジア科と日本科としては小田切氏の留学期間の延長が重要なので、ライプツィヒ大学の哲学部の言語学・歴史部門の学部長名でドレスデンのザクセン州教育省を通じて、同封の手紙を日本の文部省に送り、小田切の留学延長の依頼したいというのである。

小田切の留学先はこれによりライプツィヒ大学であったことが分かる。さて、同封の手紙とは次のような内容であった。

Leipzig den 16. Juli 1928

<sup>13)</sup>  
Nr. 712

An

das Kaiserlich Japanische Ministerium des Unterrichts in

T O K Y O  
~~~~~

Die philologisch-historische Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Leipzig beehrt sich das Gesuch des Herrn Dr. O d a g i r i, Professors an der 3. Koto-gakko in Kyoto um Verlängerung seines Urlaubes mit amtlichem Studienkostenbeitrag wärmstens zu befürworten.

Das Ostasiatische Institut der Philosophischen Fakultät legt großen Wert auf die Mitarbeit des Herrn Professor Odagiri bei den Forschungen auf dem Gebiet der Sprache und bei bibliographischen Arbeiten und würde es daher dankbar begrüßen, wenn es sich seiner wertvollen Hilfe noch ein Jahr oder, wenn das nicht angängig sein sollte, doch solange als es die Verhältnisse seiner Schule gestatten, erfreuen könnte.

Herrn Professor Odagiri würde ein weiterer Urlaub die wertvolle Unterstützung deutscher Gelehrter bei der Ausarbeitung seiner deutschen Grammatik ermöglichen.

Die philologisch-historische Abteilung
der Philosophischen Fakultät
der Universität Leipzig.

Moll

d.Z. Dekan.

(訳文)

在東京日本帝国文部省宛

ライプツィヒ大学哲学学部の言語・歴史学科は京都第三高等学校教授の小田切氏の公的留学経費を伴う休暇の延長の請願を強く支持しております。

哲学学部東アジア研究所は言語分野の研究及び書誌的作業における小田切教授の協力を非常に必要としており、それ故、差し支えがなければ、何と言っても彼の学校の事情が許す限りですが、彼の貴重な助力をなお二年ほど得られるになれば、感謝を込めて歓迎いたします。

小田切教授にとつては、さらに休暇を延長することは彼のドイツ文法書の仕上げ際してドイツ人学者の貴重な支援が得られることになるでしょう。

ライプツィヒ大学

哲学学部

言語・歴史学科

モル

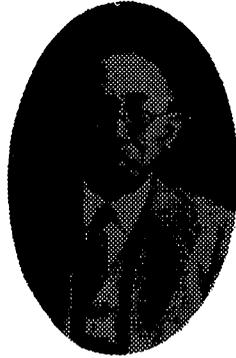
現学部長

この二通の手紙だけからは実際にモル学部長の希望通りに小田切の在留期間の延長が認められ、東アジア学科に雇われることになったかは断定できないが、手紙が書かれた日付が一九二八年(昭和三)七月二十六日であり、小田切が同年十月二十三日に在留延期をしているを考慮すると、その可能性は高いと思う。なお小田切は留学中ドイツ文法書を書きつつあったようだが、出版された形跡はない。

晩年及び死

昭和四年三月に帰国した小田切は翌年から二期に亘り三高の教務主任を務めた。^④

ところで筆者の手元には、日本放送協会から昭和五年（一九三〇）七月に発行された『夏期独逸語講座』という題するラジオドイツ語講座のテキスト一冊ある。これによると小田切と武内大造（東京外国語学校教授）が講師を務



小田切良太郎
（『夏期独逸語講座』
日本放送協会、1930）

めている。期間は昭和五年七月二十一日より八月三十日まで（但し日曜（休講）で、放送時刻は午前六時二十分より同七時まで四十分間となっている。内容はアルファベットに始まり、文法を学びながら短い独文の訳し方を学習するようになっていく。小田切がラジオ講座の講師を務めたのはこの時だけだったのかどうかは不明だが、とにかく新しいメディアであるラジオのドイツ語講座の講師を務めているのは注目されるし、当時彼のドイツ語学者としての評価がかなり高かったことを示していると思う。

小田切は晩年週二度、神戸商業大学の非常勤講師を務めた。その講師だった加藤一郎は彼について次のようなエピソードを語っている。加藤は昭和四年三月に京大独文科を卒業し、四月に神戸商業大学講師に就任した。

徹底した文法学者であった。ちやうどいいから、高商出の学生相手の初級文法のクラスをお願いしようとしたら、「君は若い間にしっかり文法を勉強しなけりやなりません。それにはブラッツの文典を精読することです」と諷められ、それから二年間はじつくりとブラッツに取り組むことにした。時に、たまたま持っていた新刊の文学書を見せると、先生は著者など無関心にパラパラとページを繰られ、本文を読み下しながら、「ここはコマが要るところだな」とうそぶかれる。こちらは恐縮して平伏するしかなかった。（中略）しばらくして「加藤君、君などは高等学校で採まれるほうが将来のためだから、わしと交替して三高に移つたらどうか、わしは神戸へ替わ

つてきてもいいんだよ。よければ三高に話をつけようか」と言われたが、それから間もなく急逝されてしまった。¹⁵

これはいかにも小田切の文法学者らしい一面を伝えるエピソードである。文中のブラッツ (Blatz) の文法書とは *Neuhochdeutsche Grammatik* のことで、これは全三巻から成る二千三百頁の大著で、専門家向けであった。

西田幾多郎の日記によると、西田は昭和七年三月二十九日に三高へ行き、小田切と溝淵進馬に逢った。これが西田が生前の小田切に会った最後であったようだ。

小田切が亡くなったのは昭和七年（一九三二）八月二十日であった。翌日の京都日出新聞は「小田切良太郎氏／脳溢血で逝去」と題して顔写真入りで次のように報じた。

第三高等学校勅任教授小田切良太郎氏は二十日午前三時避暑先なる和歌山県海草郡鹽津村で突然脳溢血のため逝去した、享年六十一、遺骸は廿日夕刻京都市河原町荒神口上る自宅に送られた。葬儀日取は未定

因に氏は明治五年五月十八日郷里茨城県阿曾郡佐野町二七四に生れ同廿三年七月東大文学部哲学科卒業同廿四年九月浄土宗大学講師同廿六年九月真宗大学講師、同廿八年四高教授に任ぜられ大正二年八月三高教授となり昭和五年四月同校教務主任、本年六月二五日勅任官高等官二等に叙せらる位階は正四位勲三等、独語教育の權威で、氏の薫陶受けたもの多く痛く惜しまれてゐる。

なほ遺族は夫人との間に子宝に恵まれ四男三女あり、（後略）

小田切良太郎は文字通り「独語教育の權威」としてそのために生涯を捧げた人であった。

当時の新聞には、葬儀は八月二十三日午後四時より五時まで京都市上京区寺町丸太町上ル山口仏教会館にて執行されるとの広告が掲載された。

葬儀の様子は翌年の三高同窓会編『会報』第五号（昭和八年）に「小田切教授の訃」と題して詳しく報じられているので、紹介しよう。

昨年八月和歌山県鹽津村に避暑中十九日夜突如遠逝された小田切教授の訃は、夢かとはかり人々を驚かせたが、やはりまぎれもない事実でやがて二十三日、寺町丸太町上ル山口仏教会館で告別式を挙行された。参列者は約五百に達し、何人も氏の深淵な学殖と率直な人格とを欽慕して措かなかつた。当日学校長並びに同窓会長の詠まれた弔辞を次に掲げて氏を偲ぶよすがとする。

弔 詞

本稿教授従三位勲三等小田切良太郎君卒然トシテ逝ク、嗚呼悲シイ哉、惟フニ君ハ独逸語学ニ堪能ニシテ実ニ
斯界ノ權威タリ、大正二年以来本校ニ教鞭ヲ執ルコトニ三十星霜、ソノ間俊秀深淵ナル学力ヲ傾注シ熱心ニ後
進ヲ指導シタルノミナラズ、傍ラ教務主任トシテ繁劇ナル校務ノ進捗ニ力ヲ竭シ、且深ク訓育ニ意ヲ用ヅ、誠実
率直ナル人格ハ学生ノ敬慕シテ措カザル所ナリキ

今ヤ遽カニコノ精勵衷誠ノ人ヲ失ヒ茫然トシテ言フ所ヲ知ラズ聊カ蕪辞ヲ陳ベテ哀悼ノ至情ヲ表ス

昭和七年八月二十三日 第三高等学校長 溝淵進馬

弔 詞

第三高等学校教授小田切良太郎君薨ス、君ハ多年母校ニ於テ育英ノ業ニ従ヒ傍ラ吾ガ三高同窓会理事トシテ
鞠躬尽瘁セラル其ノ学識ノ該博ニシテ其才教化ノ懇切ナル夙ニ内外ノ翔望スル所今ヤ卒然トシテ其ノ訃ニ接ス、
哀惜何ゾ堪ヘン聊カ蕪辞ヲ陳ネテ敬弔ノ意ヲ表ス

昭和七年八月二十三日 三高同窓会長 溝淵進馬

なお叙勲としては、添えられた「略歴」によれば勲六等瑞宝章（大正六年）、勲五等瑞宝章（同十年）、勲四等瑞宝章（同十二年）をそれぞれ授与されている。さらに前記京都日出新聞の記事によると、昭和六年六月に勲三等の叙せられた。位階は死後特旨を以て位二級を進められ従三位に叙せられた。

小田切には夫人との間に四男三女があつたが、長男の瑞穂（京大出身の理学士で京大化学研究所員）は「父を憶ふ」という文章で次のように語っている。「家庭に於ける父、是は全く私共に取つては、父の一語に尽きる。そしてその『い、父』なる言葉の内容は私共が幼少時から父を失ふまでに至る間に終始感じて来た事柄なのである。（略）父はよく私共と夫々仕事や学業等に就いて共に語る事を楽しみして居た。（略）父はまた非常な努力家であつた。（略）Leben ist Arbeit、Leben ist Hoffnung、之は父が去年夏最後の教訓であるかの如く、私共に繰り返し繰り返し語つたドイツ語の格言である。私共は忘れることが出来ない」と。

エルンスト・ヴォールファールト

来日まで

履歴書によると、エルンスト・ヴォールファールト (Ernst Wohlfarth) は一八七三年（明治六年）十一月十六日、ロイス公国のロープスタイン附近のチールバッハ (Thierbach) に生まれた。プラウエンの師範階梯の小学校において八年間修業し、同市の師範学校において六年間修業後、一八九四年学校教師の採用試験を経てグラウヒョウにおける助教師に就職した。九十六年検定試験を受けて本教師となつた。一八九七年ドレスデンで体操教師の試験を受け合格した。一八九六年九月以後ライプツィヒの教師となり傍ら当地の大学の聴講生になつた。だが一九〇二年（明治三十四年）十二月に至り、日本の金沢の第四高等学校において明治三十五年二月一日より三十七年七月三十一日までドイツ語とラテン

語の教師とし勤務する契約を締結した。給料一カ月金二百十円、宿料一カ月金十円を支給された。

契約書

現在、金沢大学資料館にはヴォールファルトと四高校長の間で結んだ日本文と英文の雇用契約書が数種保管されている。ここでは最初に結んだ日本文による契約書を紹介しよう。

第二方第四高等学校校長北條時敬ト第二方独逸国臣民

エルンスト、ウオルトファルトト取結フ契約左ノ如シ

第一條

エルンスト、ウオルトファルトヲ第四高等学校教師トシテ明治三十五年二月一日（千九百二年一月一日）ヨリ明治三十七年七月三十一日（千九百四年七月三十一日）ニ至ルニ年七箇月間雇傭ス

第二條

エルンスト、ウオルトファルトノ給料ハ雇傭期間中全壹箇月金貳百五拾円ト定メ毎月末日ニ之ヲ支給ス
壹箇月未滿ノ日数ニ対シテハ日割ヲ以テ支給ス

第三條

ハ独逸語ノ授業ヲ担任ス第二方ニ於テ必要ト認ムル時は羅典語ノ授業ヲモ担任ス

第四條

エルンスト、ウオルトファルトハ第四高等学校ノ諸規則ヲ遵守シ且授業時間割總テ等第二方ノ指揮ニ従フ
ヘシ事エルンスト、ウオルトファルトノ授業時数ハ一週二十四時ヲ超過セシメス

第五條

エルンスト、ウオルトファルトヲ雇傭期間滿了ノ後尚引続キ雇傭セントスルトキハ其期間滿了六十日前
ニ其事ヲ予告スヘシ

第六條

エルンスト、ウオルトファルトノ雇傭期間中ト雖モ止ムヲ得サル事由アルトキハ第二方ニ於テ此契約ヲ解
除スルコトアルヘシ
前項ノ場合ニ於テハ解約ノ翌日ヨリ起算シ式箇月分ノ給料ヲ支給ス若シ雇傭期間滿了前式箇月未滿

ナルトキハ期間満了マテノ給料ヲ支給ス

但第七條及第八條ニ規定スル場合ニ於テハ此限ニ在ラス

第七條 エルンスト、ウオルトファルトニ於テ契約ノ解除ヲ希望六十日前ニ第二方ニ之ヲ告スヘシ

第八條 エルンスト、ウオルトファルト疫病其他事故ニ依リ休業スルコトニ週日ニ及フノ後ハ其休業ノ間第二方ニ

於テ給料ヲ半減スルコトアルヘシ若シ休業ノ当初ノ当初ヨリニ箇月ニ及フモ尚其業ヲ執ルコト能ハサルト

キハ第二方ニ於テ此契約ヲ解除スルコトアルヘシ

第九條 エルンスト、ウオルトファルト宿料トシテ雇傭期間中全巻箇月金拾円ヲ毎月末日ニ支給ス巻箇月未滿

ノ日数ニ対シテハ日割ヲ以テ之ヲ支給ス

明治三十四年十二月廿三日（千九百二十年十二月廿三日）記名

第四高等学校校長 北條時敬

エルンスト、ウオルトファルト

これは当時旧制高校で外国人教師を雇い入れる場合、校長と当該教師の間で交わされる契約書の一般的な形式と内容であった。以後三年毎に契約を更新し、雇傭を継続して大正十年に至った。

四高時代のことは小田切の場合と同様に西田幾多郎の日記にしばしば出てくる。西田がヴォールファルトを訪ねる場合が多い。例えば、午後三時頃ヴォールファルトを訪ねクローノ・フィシャーのkantを借りて帰った（明35・1・16）独法二年の級会に出席し、自分はゴルキーの話をし、ヴォールファルトは翻訳を奨励した（明37・1・9）ヴォールファルトを訪ね夜ユンケル及びヴォールファルトを訪ね、本棚を貰つて帰った（明38・6・26）ヴォールファルトを訪ね、そこでカプフェルというフランス人に会った（明39・3・20）夜鏝甚においてヴォールファルト、スタイナーの招待会が

あり出かけた（明40・5・15）等である。そして明治四十一年二月二十日にヴォールファルトを訪ねたところ小田切が来ていて辞書を作ることを聞かされたことは既に述べた。和独辞書が出版された直後の明治四十五年三月二十八日の西田の日記には「夜 Wohlfahrt 氏より招かれ十時頃帰宅 三竹、小田切二氏来会」とあるが、これは辞書出版の祝いを兼ねた小会だったのであるまいか。因みに、三竹とは当時四高の独語教授であった。三竹欽五郎（一八六四—一九一八）のことで、西田と最も親交であった同僚の一人である。

叙 勲

ヴォールファルトは明治四十二年（一九〇九）十一月二日、日本政府より勲五等旭日賞を授与された。内閣総理大臣桂太郎に提出された文書^⑨には授賞理由を次の通りのように記している。

第四高等学校教師（奏任取扱）

勲五等旭日賞 独逸国人エルンスト、ヴォールファルト

右ハ明治三十五年一月独逸語教師トシテ雇入爾來在職殆ント八年其ノ簡一意専心教授ニ尽瘁シ生徒ノ語学力ヲ進捗セシメタルノ功績顕著ナルヲ以テ右功勞ヲ御表彰被遊頭書ノ通叙勲被仰出度旨文部大臣小松原英太郎ヨリ申立有之候間該勲章被下賜様仕度此段謹テ奏ス

明治四十二年十月二十八日

外務大臣伯爵小村寿太郎 印

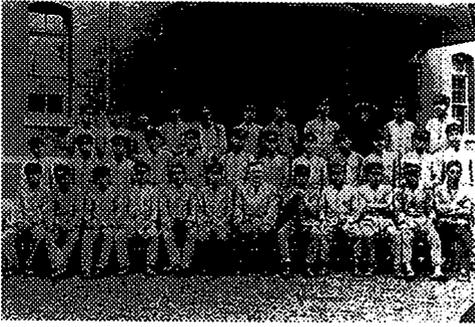
この資料では、和独辞典が出版される以前のことであるからそれについては全く触れていない。

教科書と人となり

既に小田切良太郎の章で紹介したように明治四十二年六月号『独逸語学雑誌』の「学校だより」欄には独文で四高のドイツ語教育と教科書及びドイツ語教師の教授ぶりが紹介されている。それによるとヴォールファールの受持クラスと教科書は次の通り。

- 一部三年 (英法文)
- Kron, Der kleine Deutsche
- 一部三年 (独法文)
- Kron, Der kleine Deutsche
- 一部二年 (英法文)
- Alge, Leitaden II
- 一部二年 (独法文)
- Alge, Leitaden II
- Kron, Der kleine Deutsche
- 一部二年 (独法文)
- Alge, Leitaden I
- 三編三年
- Kron, Der kleine Deutsche

クロンの *Der kleine Deutsche* (小ドイツ人) はドイツの習慣や国情を文化的に記述したもので、興趣裡にドイ



ヴォールファルト先生送別記念写真 1921年7月
『金沢大学資料館便り』No.27 Mar. 10. 2006)

ソ民情に通じ、且つ同時に、各方面の実用的単語を網羅してあるので単語の知識が豊富に得られるようになっていた。該書は明治後期から大正にかけて広く独語教科書として使用されるようになった。そして大正後期になって一般にその優れた点が知られるようになり小柳篤二訳注『クローン独逸日常生活』（日独書院、初版大正十二年）も刊行された。これは原著から日常生活に関する最も実的なもの十一章を抜粋して詳細な訳注を施したものである。Alge の Leitfaden 及び Leitfaden für den ersten Unterricht im Deutschen. Zum Gebrauch für Schüler aller Nationalitäten. Teil I のことだろう。ヴォールファルトは六クラスに対して二種の、しかもドイツ製の教科書で対応している。同じ教科書で幾つものクラスを教えるのを好んだらしい。

彼の授業ぶりについてはこうある。

(10) Herr Wohlfahrt

Des Unterrichtes ist er der Herr, ist aber daher zu gutmütig, um es weit zu bringen. Die Schüler können in seinen Stunden vom Druck anderer ausatmen. Er ist zwar etwas Murrtkopf, doch ein treues Gemüt, offenhellig in hilfsbereit.

（ヴォールファルト氏、彼は授業を意のままにしているが、それだけに気が良すぎて成功しない。生徒たちは彼の授業の時は他の時間のプレッシャーから息をぬける。確かに彼は少し不平屋だが、まじめな人で、正直で、喜んで助けてくれる）なお履歴書によると、ヴォールファルトは許可を得て明治四十五年六月十八日に二時帰国して翌年一月七日に帰校している。（帰国旅費金六百七十五円）作家の中野重治は大正八年（一九一九）に四高に入学し、二度落第して、大

正十三年（一九二四）春卒業した。彼が入学した文乙はドイツ語を中心としたクラスで、一週間でドイツ語が十二時間もあり、英語も八時間あった。彼はヴォルフアールトが大正十年に帰国するまで彼から会話を習った。中野は「先生の息子」²⁰という文章の中で師のことを大変善良な人で、いい生徒からも悪い生徒からも親しまれていたと書いている。一つには注意点なんかを減多につけぬためであったと書き添えている。これは前記のヴォルフアールトの人となりや教授ぶりと合致するものがある。

また中野は授業中のエピソードを語っている。

あるときドイツ文学の話が出て、だれかがゲー・ハウプトマンはどうですかといつてきくと、あれは暗くて好かぬというのが先生の返事であった。またあるとき人の名前の話が出て、やはり誰かが、しかし先生のお名まえはへんではないですかといつてきくと、先生はややまごついて——というのは、ヴォルフアールトというのは普通名詞にもつかわれて、そのときは安寧とか福祉とかいうような意味であったから——昔はそういう意味であったが今はただの名まえだといふふう²¹に答えられた。また多少山登りが得意らしく、日本アルプスなどという言葉が出来ぬ前にあの辺の山へ登っているといつて自慢したこともあった。

とにかく生徒たちに親しまれていたことは、いよいよ帰国することになった時、誰が音頭を取るといふことではなく、ヴォルフアールトにドイツ語を教わった在校生四百人が集まって市の公会堂で送別会が開かれたことにも窺える。

帰国後の動静及び死

履歴書によると、ヴォルフアールトは大正十年（一九二一）七月三十一日付けで四高を契約満期となり解傭された。帰国旅費として千九百三十円を支給された。

中野は「先生の息子」の中で送別会の様子を伝えている。



終身年金書(外務省外交史料館蔵)

送別会は市の公会堂で開かれた。先生は奥さんづれで招かれた。やがて生徒たちが演説をする。なかにはドイツ語で演説するものもある。それからドイツの歌を合唱したりするという具合で、先生も非常によくこび、いくらか昂奮して謝辞のべられた。

ついに、生徒たちの希望によって、むしろ強要によって、奥さんも演壇に立たれた。そうして、顔をまっかにして、ブラームスか何かの子守歌を、細い細い声でうたわれた。じつに細い声であった。蓄音機などで聞く西洋婦人声楽家のような、また日本の女の歌い手のような大幅の声でなく、日本の母親が、納戸の前でうたつてわが子を眠らせるような、ああいう細い声であった。生徒たちは拍手して喝采した。

終身年金千百圓(年金証書は大正十年八月二日付け第三十九号)が死亡するまで支給されることになった。帰国直後の住所は「独逸国キール市ゲータ町十九番地 ランデツセクレタール方」²¹⁾であった。

帰国後の動静については詳しいことは分からない。中野も「先生の息子」の中で「それから何年になるか。かつて私の教わった先生たちも何人かドイツへ行き、級友の二、三もドイツへ行き、彼らがかえつて来てから、ドイツでのヴォールフェルト先生の話を彼らの口から二、三度きくことができたが、私自身はついに手紙二本も書かずになつて来てしまった」と述べている。ただ四高の同窓会報の第二十二号(昭和十二年七月発行)の「葉書通信」欄に石坂善蔵(大

正三年卒)が次のように書いている。

「伯林で元教授ヴォルフファールト氏に会ひました日本に滞在中、貯めた貯金は『インフレ』ですつかり失ひ『スタート』から始めるのだと云うて居りました、只今は三菱商事伯林支店で元気に働いて居ります。」

これによるとヴォルフファールトは昭和十二年当時は三菱商事のベルリン支店に勤務していたことが分かるが、それが何時から何時までだったのかは不明である。

彼が亡くなったのは一九五六年(昭和三十一年)五月十一日であつた。金沢大学資料館蔵の資料によると、その死は外務省から文部省を経て金沢大学長へ伝えられた。それを承けて直ちに終身年金打ち切りの手続きが執られた。

後日談だが、丸山珪二「四高のドイツ人教師ヴォルフファールトと中野重治」というエッセイによると、ヴォルフファールトの長男と思われる、父と同名のエルンスト・ヴォルフファールトなる人が戦時中來日して、神戸のドイツ総領事館で副領事をしていたといい、(これは中野の「先生の息子」に拠っている)さらに二〇〇五年の「日本におけるドイツ年」に際し、その娘モーニカ・ライヒ・ヴォルフファールトが招待され、父のいた神戸と、祖父のいた金沢を訪れたという。

ヴォルフファールトの独学史上の功績としては、二十年間第四高等学校のドイツ語教師を務めたこと、その教え子の二人後に東京帝大独文科に進み、ハイネなどに親しみ、名高い作家になった中野重治がいたこと、そして何よりも優れた内容の和独辞書を小田切良太郎とともに編纂したことが挙げられる。

注

- (1) 石本岩根「明治年間に於ける独和及び和独辞書に就て」(『愛書』第一集、第二集、昭和八年—九年)
- (2) 金沢大学資料館所蔵。
- (3) 『帝国大学出身名鑑』昭和七年。
- (4) 「独逸講文会入会者」一覽(『独協百年』四号)
- (5) 「人名解説と索引」(竹田篤司編)『西田幾多郎全集』第十九卷。
- (6) 西田幾多郎の明治四十五年二月二十日の日記に「小田切君より自著の字引を送り来る」とある。
- (7) 『第三高等学校」一覽』(大正三年九月起大正四年八月止)
- (8) 『学士会會員氏名録』大正九年。
- (9) 『帝国大学出身名鑑』昭和七年。
- (10) 「小田切教授の訃」(『会報』五号、三高同窓会)昭和八年。
- (11) ライプツィヒ大学文書館蔵(請求記号 UAL. Phil.Fak.B114.28 I Bl.6)
- (12) モル (Bruno Moll, 1885-1968) ドイツの経済学者。一九二三年から三四年までライプツィヒ大学教授を務めた。
- (13) ライプツィヒ大学文書館蔵(請求記号 UAL. Phil.Fak.B114.28 I Bl.7)
- (14) 『第三高等学校」一覽』(昭和五年四月起昭和六年三月止)及び同」一覽(自昭和六年四月七年三月止)による。
- (15) 加藤二郎『はるけくも』(加藤二郎著作集)四〇—四二頁。
- (16) 昭和七年八月二十二日付大阪朝日新聞。
- (17) 「父を憶ふ」(『会報』五号、三高同窓会)昭和八年。

- (18) 金沢大学資料館所蔵。
- (19) 国立公文書館蔵「第四高等学校教師独逸国人エルンスト、ウォルハルト叙勲ノ件」『明治四十二年叙勲外国人二止 卷四』
- (20) 筑摩書房『中野重治全集』(第二十六卷) 所収。
- (21) 国立公文書館蔵「外国人雇傭雑件 高等学校之部 一」(大正九年十二月) に収められた年金証書に關する大正十年八月二十六日付内閣書記官長高橋光威の外務次官塙原正直宛て通牒による。
- (22) 『会員名簿』(第四高等学校同窓会、昭和十一年十二月発行) によると、石坂善蔵は大正三年に四高の二部文科を卒業、東大工学部応用化学科に学んだ人で当時戸畑鑄物会社勤務であった。
- (23) 『金沢大学資料館たより』No.27 Mar.10.2006.
 附記：本稿の執筆に際して金沢大学資料館及び畏友・丸山珪一氏(金沢大学名誉教授)には資料面でお世話になった。記して謝意を表する。

(元熊本大学)